

静岡県で活躍する医師



富士市立中央病院

院長／呼吸器内科

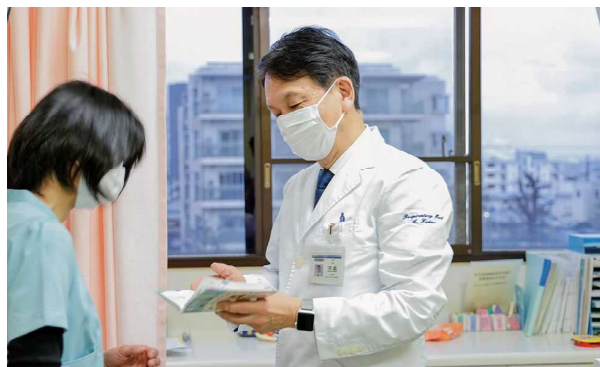
児島 章 医師

—— 医師をこころざしたきっかけを教えてください。

児島医師 私の父が勤務医であったこともあり、幼いころより周囲からは「あなたは将来お医者さんになるのよね」などと、いつも声をかけられていました。ですので、私の場合については、医師をこころざしたきっかけといえば、一番は、周りに背中を押されたから、ということになるのかもしれませんが。父は帰宅が遅く、平日は、一緒に夕食をとった記憶がありません。そして、いつも夜遅くまで、論文を読むなど仕事をしていました。夜ふと目を覚ますと、机に向かっている父の背中を、今でも思い出します。医師というのは、ほんとうに大変な仕事なのだなど、幼心ながらその時は思っていたものです。

—— 現在の診療科を専攻したきっかけと魅力を教えてください。

児島医師 医学部 5 年生の春休みに、国立がんセンター中央病院（現在の国立がん研究センター中央病院）で 1 週間あまり研修をさせていただきました。当時は、消化管の診断学に興味があったのですが、指導医であった西條長宏先生（呼吸器内科部長）から、「確立された診断学よりも、治らない病気に取り組むべきだ。」と諭され、また、その時のスタッフの先生方に憧れ、私の進む道を大きく変更することとなりました。その後、私が医師になってからは、呼吸器病学の研鑽を積むこととなります。大学病院での一般臨床の研修から始まり、がん専門病院での基礎研究に没頭しました。また米国留学を通じて、外国の方々の考え方を大きく学びました。今でこそ、多くの進歩がある分野ですが、それまでの過程には、多くの先人の方々の努力の積み重ねがあったことを忘れてはなりません。私は呼吸器病学の魅力から、その基礎と臨床の道を今まで歩んできましたが、指導していただいた先輩、そして同僚、後輩にも恵まれ、ほんとうに良かったな、と思っています。



—— 現在のご勤務先での現況について（印象や取組まれていること等）教えてください。

児島医師 昨年から院長を拝命し、現在は病院管理業務にほぼ100%徹しています。病院幹部職員とは、毎朝顔をあわせてミーティングをおこない、風通しの良い風土を醸成するよう心がけています。最近はコロナ禍もあり、マスクをつけての勤務なので、新人職員の顔と名前が覚えきれず、苦勞しています。

—— 若手医師との関わりや指導について教えてください。

児島医師 年齢を重ね、歳が離れていきますと、若手医師と直接に関わる機会はだんだんと減っていきます。呼吸内科医師・研修医・医学生とは、昼食をなるべく共にし、話題を共有するよう、心がけています。週1回の症例カンファレンスを通じて、問題点のある際には、解決点を討議しますが、どうしても自分の意見を通してしまいがちなので、若手医師の意見をまず聞いてから自分の意見を述べるようにしています。



—— 医師を目指す方や若手医師にメッセージをお願いします。

児島医師 これから医師を目指す皆さんへ。私は医師という職業を通じて、自分の人生を厚く、大きく、そして豊かに展開することができました。確かに責任が重く、生涯を通じて努力を要する職業です。しかし、自分の進んだ道に悔いはありません。皆さんも、ぜひ医師を目指していただきたいと思います。

そして若手の医師の皆さんへ。私の座右の言葉として「業精於勤（業は勤るにおいて精し）」があります。韓愈の有名な一句で、ひとの能力は、日々の努力によって、さらに研ぎ澄まされる、という意味だそうです。皆さんの毎日の積み重ねは、必ず将来に開花することでしょう。多忙の毎日と思いますが、健康に留意し、精進してください。



プロフィール

児島 章 医師

趣味

- ・毎朝のジョギングとラジオ体操
- ・愛犬との散歩
- ・B級グルメ

- 1984年3月 東京慈恵会医科大学卒業
- 1984年5月 東京慈恵会医科大学附属病院 研修医
- 1987年6月 国立がんセンター中央病院 呼吸器内科 レジデント
- 1990年2月 同上 チーフレジデント
- 1995年4月 ニューヨーク病院-コーネル医療センター、呼吸器科、visiting fellow
- 1999年11月 富士市立中央病院 内科診療部長
- 2003年2月 東京慈恵会医科大学 呼吸器・感染症内科(青戸病院)講師ならびに同診療部長
- 2008年4月 東京慈恵会医科大学 呼吸器内科(青戸病院)准教授
- 2013年1月 東京慈恵会医科大学 呼吸器内科(葛飾医療センター)教授
- 2021年4月 富士市立中央病院 呼吸器内科・副院長
- 2022年4月 同上 院長
- 現在に至る